

第242回 俳句サロン「道草」（5月）句会記録

5月9日（金）曇天、朝の気象情報では、午後には雨になるかも知れないから、外出する人は、雨具の準備をした方が良いといっていました。が、結果的には夕刻まで雨は降らず良かったです。ただ、今月も句会に参加した方は少なくて、残念ながら6名でした。体調を崩されて欠席された方もおられます、私たちは「元気に百歳クラブ」です。お互いに健康には充分注意し、夏バテをしないように、元気に暮らしましょう。

○ 投句に参加された方々のお名前（15名）

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴樂さん、手嶋錦流さん、
原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾自然。

○ 句会に参加された方々のお名前（6名）

多佳さん、傘吉さん、創風さん、荻女さん、和感さん、自然。

今月の天賞句と投票の多かった句は、下述の通りです。

◎『長屋門すいと潜りて初燕』	晶如	天2☆8
◎『年古れど武者人形の男振り』	傘吉	天2☆5
◎『薰風の縦横に吹く交差点』	まさあき	天2€4
◎『木漏れ日の小径通れば風薰る』	傘吉	天2€3
◎『すれすれに江ノ電とほす青簾』	晶如	天1☆10
◎『脚病みも一二歩軽し五月晴れ』	まさあき	天1€4
◎『草刈りや草の匂いの風立ちて』	清助	天1€3
◎『棚下で故人を偲び新茶飲み』	柴樂	天1€2
◎『清流に星ひろふごと金玉糖』	荻女	天1€2
◎『万縁のなか夫の口笛よみがへる』	荻女	天1€1

まず一番は、晶如さんの句「長屋門すいと潜りて初燕」が、天賞二つと8票（☆印）を獲得しました。都会では珍しい長屋門構えの家での情景です。今年もその長屋門を、燕が行き来する時節です。この句は「ひと言」でもご意見をいただきましたが、今月は席題が「夏の句」ということですから、季語「初燕」では春の句になります。下五を「夏燕」に推敲すれば、夏の句ですし、巣の中の子燕にせっせと餌を運ぶ親燕の情景が、読者には見えてくるのではないかでしょうか。

次に、傘吉さんの句「年古れど武者人形の男振り」が、同じく天賞二つと☆印を獲得しました。男の節句に飾られる武者人形が季語、年季を経て古くなても職人の人形造りの腕前が違うのでしょうか。読者には、今なお光る人形の男振りが見えてくるようで、思わずにっこりと笑みがこぼれる句ですね。

次にまさあきさんの句「薰風の縦横に吹く交差点」が、天賞二つを獲得しました。この句の季語「薰風」は「緑の香りを運んでくる五月の南から吹いてくる風」と、歳時記にはあります。ただ、交差点に吹く風は、風が巻いて幾分強くなるように思われます。薰風と交差点の対比、読者の共感を貰ったようです。

次に傘吉さんの句「木漏れ日の小径通れば風薰る」も、天賞二つを獲得しました。何だか懐かしい灰田勝彦のウクレレによる「森の小径」が、聞こえてくるような句です。季語は「風薰る」、中七、下五の「小径を通れば風薰る」が、読者の共感を得たのでしょうか。傘吉さん、今月は天賞二つの句を2句詠みました。お見事です。

最多得票賞（☆印）の一番は、晶如さんの句「すれすれに江ノ電とほす青簾」が、10票獲得しました。東海道本線大船駅から鎌倉、江の島を経由して藤沢までを運転する私鉄電車です。江の島から鎌倉に向っては、まさに線路すれすれに走る電車です。沿線のレスト

ラン、カフェでは、それを観ながら食事をしたりお茶をしたりしています。この景を見事に捕えました。筆者はこの句が今日一番の句ではないかと思いました。

もう一つ、天賞一つの柴樂さんの句「棚下で故人を偲び新茶飲み」があります。この句の上五「棚下」ですが、意は「タナジタとも読み、商店の軒下、店先」ということです。例えば、これを藤棚のようなところと、解釈して先に進んではどうでしょうか。故人を偲ぶ場所が、お店先であってはじめて、読者の思いが広がるのではないかでしょうか。詠み手としても、下五は「新茶飲み」が良いのか、「新茶飲む」が良いのか、如何でしょうか。

高柳克弘著 添削で掘む『俳句の極意』から抜粋（96頁～）

ふさわしい語順

「俳句の言葉は、子供が遊びに使うブロックに似ています。取り外し自在、組み立にはいくつものバリエーションがあります。出来上がった一句がしっくりこなかつたら、言葉を入れ替えてみましょう。

名人の推敲例

昭和6年の冬、大学の修学課程で行き詰まり、鬱々とした日々を送っていた30歳中村草田男は、思い立って、かつて自分が通った小学校を見に行きます。20年ぶりに訪れた母校から飛び出してきたのは、学校帰りの子供たち。てっきり、昔の自分と同じように、黒縁に足駄の生徒が出てくるかと思っていたのですが、実際に現れた彼らは、金ボタンをつけた黒外套のいでたちでした。折しも降っていた雪と合わせて、

雪は降り明治は遠くなりにけり

（推敲前）

という句が閃きました。

ところが、上五の「雪は降り」に納得がいかず

降る雪や明治は遠くなりにけり

（推敲後）

という句に改作いたしました。

「雪は降り」から「降る雪や」へ、語順を変えただけなのですが、大きな違いが生まれています。日本語では、目立たせたい語は後ろに置かれますので「雪は降り」では「降り」のほうが目立ちます。「雪が降っていました」と、出来事を説明している印象が強くなり、日記的、報告的になります。「降る雪や」とするとどうでしょう。「雪」が目立ちます。この場合、さらに切字の「や」が添えられていますので、「雪」そのものに焦点が当たられ、空から降ってくる白い粒の映像が浮かんできます。見事な推敲です。

ちなみにこの句は、「や」と「けり」を二つ同時に詠み込むという、作句の常識に反している句としても有名です。「雪」を具象的に見せるのが作者の狙いなのですから、大きな問題ではありません。むしろ、時の移ろいに対する作者の深い感慨を訴るために、「や」「けり」の併用は効果的なのです。

推敲と語順・・・自分の詠んだ句を何回も読み返そう！

中村草田男が母校を訪問して、服装の変化を見るにつけ、しみじみと「明治が遠くなっているなあ」と、感慨にふけられたのでしょう。その様子を、降る雪を通して句に表現するとき、語順によってこれだけの差が出てくるわけです。何度も何度も読み返してみることを、芭蕉は「舌頭に千転」と言いました。自分の詠んだ句を声に出して読んでみましょう。

6月は会場の都合もあり、6月9日（月）が「道草」句会の日になります。元気に新橋ばるーんに集まりましょう。

自然記